

## 東満要塞慰霊の旅 1-2

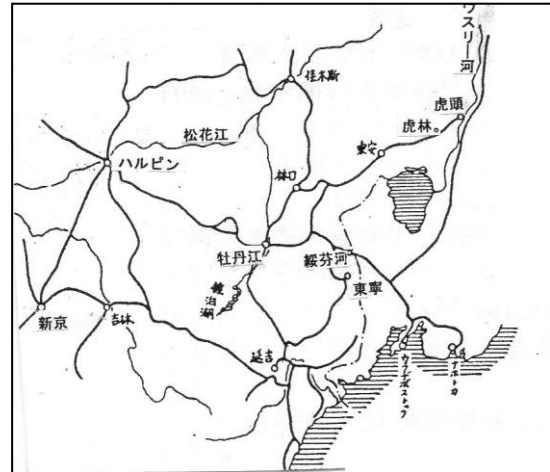


川島 順  
予科21-7  
航空7-1  
(越谷市)

### 1. 牡丹江・第1方面軍司令部跡を探索

平成13年6月19日 am7:45 我々満洲訪問団の一行15名を乗せて北京を飛び立った中国海南航空の旅客機は am9:40 牡丹江飛行場に着陸した。休む暇もなくバスに乗り込み牡丹江市内を一巡した後、まず旧満鉄の鉄道員の宿舎「牡丹寓」を訪ねた。約70年前に建てられた古びた薄暗い古煉瓦の長屋、現在も鉄道員の宿舎として使用されている。次に訪れたのが放送局、昔の地図のとおり小さなロータリーの角に古びた建物を発見、現在も放送局として使用されている由。ここを起点として第1方面軍の司令官、当時は山下将軍の官邸を訪ねた。残念なことに既に取り壊され赤煉瓦の塀の中には草が生い茂っていた。近くに兵隊の宿舎があるとのことで、探すと古びた煉瓦作りの二階建ての長屋が当時のままの姿で立ち並んでいた。現在も薄暗い部屋には住民が質素な生活

を営んでいた。当時の地図を頼りに軍司令部跡を訪ねたが、人民軍の基地の傍で写真撮影もままならなかったが、高い赤煉瓦の塀の中に当時の建物が未だに使われているのが見受けられた。



満洲東北部

次に、陸軍病院跡を訪ねた。今は「紅旗病院」となり、多くの白い建物が新設されていたが、この建物の後ろに僅かに屋根を望ませている黄色い建物が当時の病棟とのことであった。

さらに、今回の目的の一つであった小生の家族が住んでいた将校官舎を探した。

いくつかの路地をバスで行きつ戻りつしたがなかなか見つからず、最後は徒歩で路地を訪ね歩くと、それらしき建物を発見。胸を躍らせ高い煉瓦の塀越しに中を窺うと立派な2階建ての建物の傍には家庭菜園まであり、品のいい婦人と子供が遊んでいた。当時小生は士官学校にあり、一度もこの家を訪ねたことはなかったので、たぶんこの家であろうと写真撮影をして、今

回一緒に行けなかった弟に後で確認してもらったことにした。

話の途中になるが、ここで今回の旅行の目的と同行者の事に触れよう。今回の旅行を企画したのは日洋航空の浅田均さん。自衛隊を退官後この会社に勤め、毎年旧軍関係縁故の地を訪ねる旅行を計画している。

昨年は大連、旅順、泰天（審陽）、長春（新京）等を訪問した。その時、60期では齊藤長寿<sup>⑩</sup>、竹中撃<sup>②</sup>等多数参加した。今年は彼らに誘われて高本惣治<sup>⑩</sup>と共に小生も参加することにした。主目的は東寧、虎頭の要塞を訪ね、当時の戦闘の跡を検証するためである。

そのために戦史学の大家、自衛隊の教官を務めた永江太郎氏に同行をお願いし、評論家田中秀雄氏等戦史に興味を待つものが集まった。変わり種としては中国の留学生、東大大学院で人文学を専攻するK女史、卒業論文として「日本人と満洲」をテーマに選び、我々を徹底的に解剖しようとの魂胆。彼女との議論には色々面白いこともあったが、それは別の稿に譲ることにして本筋に入りたい。

## 2. 国境の町綏芬河へ

翌朝、牡丹江を中型バスで am 7:00 出発、160km 先の綏芬河に向かう。自動車道路の両側にはきれいに区画された水田が延々と続き、その先の遙か向こうになだらかな丘陵が連なっている。時折部落に遭遇するが一様に明るい煉瓦色の屋根と側壁を待った建物がきれいに並んでいる。

昼近く綏芬河に到着。当初はここで市内見物を予定していたが、急遽東寧に行くことになり、昼飯もそこそこに約50km先の東寧要塞に向けて出発。綏芬河の市内は近代的な建物が並び立ち、道路にはロシア人の姿とロシア語の看板が多く見られ国境に近いことが肌で感じられる。

小一時間走ると、突然、永江教官が「あれがロシアとの国境です」と左手の小高い丘を指さした。丘の麓に沿って白いペンキで塗られた木柵が長々と続いている。あまりにも簡単で無造作な境界にチヨット拍子抜けする。しかし丘の上には望楼がハッキリと肉眼で見られる近さにあった。やがてバスは右手の丘に向かう細道を分け入り、そびえ立つ岸壁に岩石がむき出しになっている東寧要塞最大の動山（勝鬨）陣地前の広場に着く。

この勝鬨陣地は東寧要塞の中でソ連軍の猛攻にも屈せずその名の通り最後まで耐え抜き、8月26日3回目の停戦の軍使として同伴した河野参謀の説得でようやく降伏したという名誉ある陣地である。

今回は、東寧要塞および虎頭要塞を紹介したい。(続)

秩父平成13年10月 73号

## 3. 東寧要塞・勝鬨陣地

牡丹江から200km、中型バスにゆられて我々一行15名はソ連国境を間

近くに望む東寧要塞最大の勝鬨陣地前の広場に到着した。勝鬨陣地は岩壁が剥き出しになった小高い丘に無数の坑道をくりぬいて構築されていた。所々に砲台口がポッカーリと口を開けている。

広場に立てられた勝鬨陣地の全容を凶解した看板の前で永江教官の説明を聞く。



勝鬨陣地前の案内図

勝鬨陣地は20年4月までは大中の火砲約30数門を有する優秀な部隊であったが、その後、部隊、火砲共に南方に抽出され、ソ連侵攻時は30糎砲1門、中迫2門、山砲数門という極めて貧弱な火砲しか備えていなかった。開戦当時、飛行機300機、火砲100門を有する敵の攻撃を受け、2日間で7000屯を超える砲爆撃を受けたが、時には夜間切り込み等の反撃を行いながら20日まで耐え抜いた。21日、23日と再度にわたり敵の軍使が来て降伏を勧めるも拒絶、最後は軍使に随伴してきた開東軍河野参謀の説得で26日遂に降伏した。

広場から急勾配の階段を息を弾ま

せながら登ると、入り口の傍らには入場券を販売している土産物店があった。入り口となっているかつての四角な砲台口は敵弾で丸く削り取られて大きな口を開けている。当時の砲撃がいかに凄まじかったかを物語っている。

薄暗い坑内を懐中電灯の光を頼りに奥に進むとやや広い洞窟にでる。薄暗い電灯に照らされた室内には「侵華日軍東寧要塞博物館」と大きな看板がかけられ、大小さまざまな砲弾が床に並べられている。周囲の壁には東寧陣地とは関係無い日軍の残虐行為の証拠と称する写真（中国各地の戦争記念館において陳列されている物）と宣伝文が貼り付けられていた。

こんな僻地の要塞までも外貨獲得の手段と共に反日教育の道具にしようとする北京政府のしびとさを感じさせる。さらに縦横に掘られた坑道と指令室、寝室、医務室、貯水室、弾薬庫等を巡りながら、この境内で悪戦苦闘した将兵や、将兵と運命を共にした看護婦、将兵のご家族のことを偲び暗澹たる気持ちになった。

#### 4. 綏芬河一虎頭

再びバスに搭乗、綏芬河に引き返し、哈德利賓館に一泊する。

翌日6月21日、7時過ぎにバスで綏芬河を出発。窓外の景色は相変わらず広々と続く水田、畑、はるか彼方にゆるやかに横たわる丘陵、そして、ときどき赤煉瓦の屋根と外壁の民家の集落の繰り返しである。2時間も走る

と、丘陵が迫ってきた。所々にボタ山が目につく。地図で調べると鶏西という所で、どうもここら辺は石炭の産地らしい。やがて選炭場らしい工場が眼に入ってきた。

昼近くなって、次の目的地、密山に着く。密山は地方の中都市、市内には近代的なビルも立ち並び、鉄道の駅もある。

「公務接待定点単位」の看板を掲げたレストランで昼食を取る。テーブルの上には大皿に盛られた中華料理が次々運ばれてくる。味は結構美味しいが食べきれないで眺めていると皿の上に皿を重ね、テーブルの上は大盛りの中華料理の皿の山で埋まってしまった。

昼食後再びバスに搭乗。密山郊外迄はコンクリートの道路で、余り振動も無かったが、郊外を外れると舗装のない裸道となった。バスの振動は途端に激しくなり、窓越しに撮影するビデオの操作もままならなくなってきた。

### 遂にバスはエンコ

しばらく凸凹道を走っていると異様な臭いがしてきたと思ったらバスが急停車した。運転手が車の下に潜って調べるとクラッチが焼き切れてしまったとのこと。

辺りは広野の真っ只中、民家一つ見当たらない。ちなみにこのバスは半年前にアモイで製造された新車とのこと。

ガイドが携帯電話でしきりに連絡している。代わりの車を出すには2～3時間かかるとのこと。もう3時過ぎ

なのでここで野宿かと覚悟を決めかけたが、ガイドや運転手は全く慌てない。路線バスが通っているので、路線バスに乗せて貰おうと提案。やがて路線バスが1台来た。

止めて交渉するも満員で無理。次に大型の郵便車が通りかかった。止めて牽引して貰うことにした。郵便車の運転手は嫌な顔一つせずに快く引き受け、ワイヤーを取り出し車を繋ぎ、エンジンをかけた途端にガツンと音がしてワイヤーのフックが壊れてしまった。万事窮す。

再びガイド達が協議し、我々旅行者は路線バスで、壊れたバスは旅行者の荷物ごと郵便車で牽引して貰うことにした。30分経った頃、2台目の路線バスが通りかかった。止めて交渉すると、幸い15名程の空きがあり全員座ることが出来た。路線バスに揺られ、次の宿泊地の虎林まで行くことが出来た。バスと我々の荷物は郵便車に引かれてやや遅れて虎林に到着した。その日は虎林賓館に泊まる。

この事故処理について中国人の対応が極めて悠然としていたことと、見ず知らずの人でもお互いに助け合うという素朴な人間関係を眼の辺り見た気がした。恐らく日本ではこのようにスムーズに解決できなかったであろう。また、乗員もだれ一人騒ぐ人がいなかったことは、このように広大な大地の中にいると気も心も自然と大きくなりこせこせしなくなるのであろうか。

翌22日は、虎林で調達した小型バ

スにギュー詰め状態で出発した。道路は至る所で補修中、振動はますます大きくなる。窓の外は相変わらず広大な畑が続く。

やや1時間も走った頃であろうか、永江さんが突然、「ここら辺りが日本人の開拓地です。あそこに見える部落が憲兵隊のあった所です。」皆一斉にカメラを向ける。

## 5. 列車砲陣地・水克

しばらくすると採石場のような所でバスは横道に逸れる。ここが列車砲の陣地があった水克である。林の中を分け入り最後にコンクリート製の一軒の農家の前で止まる。恐らくこれは陣地の監視場の跡ではないか。農夫、恐らくこの陣地の管理人の案内で、窪地に降りてゆくと、大きな鉄の扉が閉まった洞窟があった。



列車砲格納用トンネルの入り口

この管理人はガイドの友人ということで特別、扉を開いて中を見せてくれた。

100メートル以上もあろうか薄暗い真っ直ぐな洞窟を進むと足下に大

きな砲弾が一つ転がっていた。さらに中に進むと、左側に木製の砲弾置き場が長々と作られていた。その先はビニールの布で仕切られ入れなかった。直角方向に別の穴が掘られていた。隊員の宿所や道具置き場である。

この列車砲は24 糎加濃砲で、最大距離5万米、シベリア鉄道をはじめとし後方攪乱用に配備されていたが、ソ進侵入直前、通化方面への移動が命じられ解体中で、一度もその任務を全うすることが出来なかった。また、線路や全ての装置は取り外されその洞窟のみが残されていた。

ちなみに虎林から虎頭迄では嘗て日本が建設した鉄道が敷設されていたが戦後のどさくさに紛れてソ進軍が線路を持ち去り、現在その線路跡は道路として使用されている。

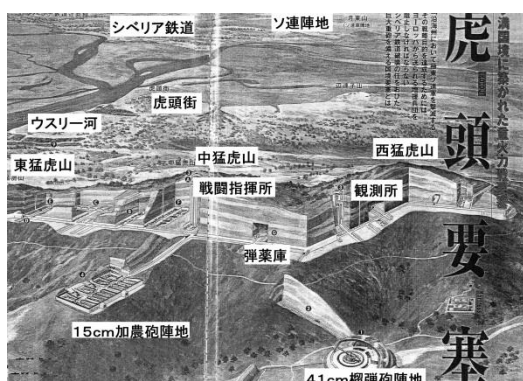
## 6. 虎頭要塞

再びバスに搭乗、虎頭要塞に向う。大分林が多くなってきた。虎頭の郊外に差し掛かると、突然バスはゲートで遮られ停止する。人民軍の検問所である。やはり、虎頭は人民軍にとっても重要な地域であるのか。10分ほど調べられ通行を許可される。

暫く行くと龍宮城のようなゲートがあった。どうやら虎頭一帯は公園に指定されているらしい。門は公園の入り口の標識であった。園内には「侵華日軍虎頭要塞遺跡博物館」と称する真新しい建物が建てられ有料で参観できる。博物館の傍らには「日本軍用神社遺跡」のタテカンが神社の礎石の上に立てられていた。また、入り口には



41 糎の砲弾が2個並べて置かれていた。



虎頭要塞配置図

まず、41 糎榴弾砲の陣地跡を見に行く。

林の中の細道を辿っていくと小さな広場があり、その真ん中にコンクリートの塊りみたいな砲塔陣地があった。厚さ数メートルにも及ぶ鉄筋コンクリート製のドームは無残にも破壊され、円形の台座には水が溜っていた。

この巨砲はシベリア鉄道を破壊する目的でここに据え付けられ、開戦直後6発でイマン鉄橋を破壊し、迂回線を不通にしてその目的を達成した。



41cm 榴弾砲の破壊されたドーム

その後も130発発射し、威力を発揮したが、ソ連軍の砲爆撃のため18日に破壊された。この巨砲は戦後ソ連が持ち去ろうとして船で運搬中ウスリー河の中洲で座礁し、そのまま放置されていたという。

博物館の中は例によって日本軍部非難の宣伝文や写真のオンパレード。時間の関係もあり、それを素通りして、館内の通路より虎頭要塞内に入る。要塞内は天井の高い坑道が縦横に連通し、到る所に個室が設けられている。戦闘陣地の坑内よりも遙かに立派で頑丈に作られている。

坑内には指令室、発電所、医務室、寝室、弾薬庫、浴場、炊事場まで設けられ、食料、弾薬は1万の将兵が3か月戦う量が蓄えられていたという。しかし、20年4月に9千名の精鋭が

南方に送られ、あとは僅か7百名の兵隊に急派集められた7百名の補充兵を加えた1割程度の兵力で開戦を迎えた。はじめは互角に渡り合っていた守備隊も10倍にもおよぶソ連の猛攻に次第に劣勢に立たされた。守備隊本部では15日の玉音放送をキャッチするも停戦交渉を拒否し戦闘を続行したが、26日のソ連の総攻撃で虎頭要塞は壊滅した。

## 7. ウスリー河の遊覧船

我々一行は気を取り直してバスでウスリー河に向かった。森林を通り越えて小さな部落に突き当たると、そこには兩岸まで水を湛えたウスリー河が右から左にゆっくり流れていた。河の中央には灌木の生い茂る中洲が連なっている。この中洲はロシア領、従って国境は中洲とこちら側の岸との中間の水路となる。対岸の丘の上にはロシアの監視塔が立っている。

その遙か先にはイマンの町が望見できる。

20人乗り程度の遊覧船で30分ほど回遊したが、対岸の岸辺には黒ずん

だ色のロシアの警備艇が繋留されていた。人影は見えない。

上陸して川辺を散策しながらふと思った。中ロ国境には緊張感が全くない。日本が国運を賭して構築した東寧、虎頭の両要塞は観光地化され、ウスリー河には観光船が回遊しているではないか。

それは中ロ友好の証し綏芬河で見たように国境貿易は盛んである。中国人の移住と経済的な浸透により隣接国に対する中国依存体制を確立し、実質的に他国を支配しようとする平和浸透作戦の一環ではないか。かかる思いを胸に再びでこぼこ道をバスで密山へ引き返した。

密山駅前で食料品を買い込み、デゼル車の寝台車に乗り込む。4人組の上下寝台のコンパートメントで酒を飲み交わしながらハルピンまでの15時間の夜汽車の旅を楽しんだ。  
(完)